

二強^てサガ₅

N E W S A G A

阿部正行

Abe Masayuki

目次

本編
7

番外編
巨人殺し
255



現魔王に忠誠を誓う魔族。
カイル達と奇妙な縁を
築きつつある。

ユーリガ

己が栄達のために
人族との戦争を望む
好戦派の魔族。

炎眼

三腕

ただ戦うために
人族との戦争を望む
好戦派の魔族。

雷息

激しい憎しみから
人族との戦争を望む
好戦派の魔族。

暗殺をはじめとする
闇の技術を受け継ぐ
「シノビ」族出身の美女。

ミナギ

美しいエルフの精霊使い。
カイルの村を訪れ、
なほ崩壊的に仲間になる。

ウルザ

シルドニア

マジックリング
伝説の「魔法王」が自分の人格や知識
の一部を複写した魔剣の精神体。

リーゼ

カイルの幼馴染。格闘の才能が
あり、その腕前はかなりのもの。

セラナ

カイルの幼馴染で、
女の子に目がない
ムードメーカー。

カイル

主人公の魔法剣士。
一度魔王を倒したが、
真紅の宝石の力で過去に
戻り、再び冒険を始める。

Main Characters
主な登場人物

本編

視界いっぱい広がる、一瞬海と見間違うぐらいの広さを持った大河——チグテス河。

世界最長となるこの河は、ロインダース大陸の民族領を西から東に横断する形で流れている。本流の川幅はといえば、目を凝らしても対岸は遠く霞んで見えないくらいに大きい。

そんな雄大な流れの上を行きかういくつもの船のうちの一つに、カイル達はいた。

ゆつくりとだが確実に流れを遡っていくこの旅客船は、これほどの大河でなければとても運用できないような巨大さで、五百人はゆうに乗れるだろう。甲板上には、カイル達の他にも乗客の姿が多数見受けられた。

船が川を遡上する方法としては、帆に風を受けたり、川岸から家畜に引かせたりなどがあるが、この船は調教した川の魔獣に牽引させている。

船首に繋がれた鎖の先は水中に向かっており、川底を巨大なカメの形をした魔獣がゆつくりと歩いて船を引っ張っていく。

川に迫るかのようにそびえ立つ岸壁には、神話になぞらえた石像が並んでいる。

何百年も前に稀代のドワーフ彫刻家が一生をかけて一人で彫ったというこの遺跡は、今では観光

名所となっており、甲板には多くの見物人が出てきていた。

「あれが有名なゲオラの彫刻か……見事だ、ドワーフが彫ったとは思えないな」

種族単位で仲の悪いドワーフの仕事を見て、エルフであるウルザはやや不本意さを滲ませながらも褒める。

「確かに見事じゃな……お、あれは？」

シルドニアが右舷の先に見えてきた、赤や黄などの鮮やかな色をした水鳥の群れを指さす。その数は数えきれないほどで、ほとんど水面を埋め尽くしている。

「ふむ、あの鳥はガーヨの群れであるな。ザーレスの時代から観賞用として有名な水鳥じゃった」

シルドニアはそんな風に言いつつも、実際に見るのは初めてだ、と少しだけ興奮気味の様子である。

楽しげな姿は幼い外見に相応のもので、その中身が人族史上最も偉大な魔法使いとして伝わる『魔法王』の分身であるとは思えなかった。

「しかし、当時はあれほどの数はいなかったはず。随分と繁殖を……おお！」

シルドニアがそう言った丁度そのとき、水中から巨大な魚の群れが現れ、それに驚いたガーヨの群れが一斉に飛び立った。

視界を埋め尽くす幻想的な色彩の美しさに、カイル達のみならず甲板上にいた全ての客が目を見られる。

「わあ、凄い……」

リーゼは目を丸くし、口の前で両の掌を合わせながら感嘆の声を上げる。

「……でもあの鳥、筋が多くて食用には適さないのよね、魚の方も臭みが強くて食べられないそうだし」

しかし彼女はひと通り歓声を上げた後、残念そうな声を出した。その目は、魚や鳥を完全に食材として見ていた。

「そういう感想はどうかと思うぞ」

素直に見入っていたカイルが、花より団子どころではないリーゼにため息をつく。

「なんじゃそれはつまらんな、あの魚は食い応えがありそうであつたのに」

「あ、でも調理次第ではいけるそうよ。例えば、牛の乳に漬けて臭みを消す方法があつて……」

「ほうほう」

食用に適さないと聞いて同じく残念そうになったシルドニアだが、リーゼの説明に目を輝かせ始める。

そんな幼馴染を見て、遅くなったと思おう、とカイルは自分を納得させた。

「それにしてもほんとでかい川だよな……リマーゼの小川とは大違いだ」

甲板の柵に頬杖を突いていたセランが、故郷の街に流れていた川を思い出し、感心ともぼやきともとれる声を出す。

故郷の名がセランの口から出たことで、リーゼは思い出したようにカイルに聞いた。

「そうだ、カイル。リマーゼにはいつ戻るの？ 一度くらいは戻ってもいいと思うけど……きっと

大歓迎してくれるよ？」

カイルがエッドス国で『竜殺し』の名声を得てから三か月が経った今、彼に対する世間の評価は大きく変化していた。

武人として最高の称号である『竜殺し』が数百年ぶりに誕生したという噂は、瞬く間に人族の間に広がっていき、カイルの名を多くの人が知ることになった。

これにより、来るべき魔族の襲撃『大侵攻』に際して人族への影響力を持つべく、まず己の知名度を上げるというカイルの目論見はほぼ達成できていた。そうして一区切りできたのだから、一度故郷に戻らないかとリーゼは言っているのだ。

「……いや、まだ早い。やることがあるからな」

カイルは少しだけ考える——ふりをした後、首を横に振る。

「それに下手に戻ったら、当分拘束されそうだ」

リマーゼは何の特徴もない辺境の街だ。有名になった今のカイルが戻れば、祭り並の騒ぎとなるだろう。そうなれば当分の間、旅を再開できなくなることは明白だった。

「ああ、まあ確かに……レーゼル様なんかは絶対街の発展に利用するわね。銅像ぐらい建てるかも？」

「もうやってるんじゃないか？ 噂を聞いたらすぐに、『竜殺し』生誕の街、とか宣伝ぐらいはしてそうだ、あの婆さん」

リーゼとセランは、優しくも抜け目のない故郷の長老のことを思い出す。

カイルもまさに現実にあつてえそんな故郷の状況を想像し、顔色が悪くなる。

「やっぱり当分戻れないな……何なら俺に構わず、リーゼやセランだけで戻っていいんだぞ？」

「あたし達だけ戻つてもしょうがないじゃない」

「俺だつて戻るつもりはねえよ……まあ、お前は他にも帰りたくない理由がありそうだがな」

セランがニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべながらカイルを見る。

「どういふこと？」

リーゼの問いに、セランはカイルに聞こえないよう——実際はまる聞こえだが——わざとらしく小声で言う。

「ほれ、セラリアさんの件で、顔を出しづらいんだよ」

「ああ……」

リーゼが納得した顔になる一方、母セラリアの名前を出されたカイルは懔然とした顔になる。

旅の途中で出会った、セランの義母でカイルの師匠でもあるレイラが言うには、セラリアは現在妊娠中とのことで、間もなく出産を迎えるはずだった。

「あたしとしては赤ちゃんに会いに行きたいんだけど……」

子供好きのリーゼだ。それこそ実の弟、妹のように可愛がるだろう。

だが肝心のカイルは明らかに乗り気ではない。

「……別に弟だか妹だかが出来るのはいいんだ。ただ、今帰ると騒がしくさせてしまうだろう」
間もなく生まれるというのであれば、自分がかえって邪魔になる。カイルはそう言うのだが、

リーゼは大きくため息をついた。

別に親子仲が悪い訳ではないが、どうもカイルは昔から母親に対して素直になれないところがあり、特に思春期は顕著だった。

妊娠の話聞いて以降、カイルの態度はそれが再発したかのようになっている。嬉しいとか嬉しくないとかではなく、色々と複雑で受け入れ難い様子だ。

「ほんと子供よね……」

リーゼがとことん呆れた口ぶりで零し、カイルを半目で睨む。

「うぐ……」

その視線にカイルは言葉に詰まる。

「大体カイルは昔からそうなのよ。確かにセラリアさんはあたしの目から見ても家事全般まるで駄目だし、生活能力皆無で主婦失格だと思うわ」

「お前も相当酷いこと言ってるな……」

セランが思わず突っ込むが、否定はできなかった。

「でも、カイルのことを本当に大事に想ってくれているでしょ。なのに素直になれないなんて……」

「あゝあゝ聞こえない、聞こえない」

都合が悪くなったカイルは、両手で耳を押さえて喚き始める。

昔、リーゼに問い詰められたときに誤魔化す、というか開き直るときによく使っていた手だ。

「ちよつと！ 話を聞きな……」

「何を騒いでいるんだ、お前達は。目立ちたくはないのだろう？」

ウルザにあきれ顔で注意されると、リーゼは慌てて口を押さえ、カイルもしまったと周りを見る。幸いにして、他の乗客は景色を見るのに忙しいようで、二人はほっと胸を撫で下ろした。

今までカイルはなるべく目立つようには行動してきたが、既にカイルの名は一人歩きし、勝手に広まっていく状況になっている。

こうなるとこれまでとは逆に、立ち居振る舞いを正し、悪目立ちをしないよう気を付けなければならぬ。どこで誰に見られているか解らないので、理想的な英雄像を崩さないよう、常に言動に注意していた。

現に、この船に乗った直後、一般客からひそひそと遠巻きに噂されていたのだった。

解っていたことではあるし、自分が望んだことでもあるが、当分は息苦しい生活が続くことになる。

「こほん……とにかくだ、もう少しで目的地なんだから、そっちでの用を済ませるのが先決だ」

カイルは咳払いをして気を取り直す。

「丁度見えてきたぞ。あれであろう」

シルドニアが前方を指さすと、この旅客船の終着点である都市バヨネが見えてきた。

バヨネはチグレス河の中州なかすとも言うべき場所にある観光都市で、同時に商業都市でもあった。

都市の周りには旅客船や貨物船など大小様々な船が数多く泊まっており、人と物が集まる都市だ

とひと目で解る。

もちろん、カイル達はただ船旅をしていた訳ではない。先ほどまでのような観光はあくまで、いで、他に目的があつてこの船に乗っている。

名声が充分に広まった今、カイルの計画は次の段階に入った。

それは、人族の中でも有力者や権力者と言われる人物に会い、人脈を形成すること。

そして、まず会うべき人物が都市バヨネにいるのだ。

港に到着したカイル達は、シルドニアの「何はともあれ食事じゃな」との提案に全員で賛成し、観光客用の高級レストランに向かった。

バヨネは水路が張り巡らされた都市で、小型の船に乗って街の名所を案内されるのが名物となっている。カイル達が入ったレストランは、この都市の大通りと言うべき大きな水路に面していた。

「眺めがいいわね」

リーゼが手すりに身を乗り出しながら、楽しげな声を出す。カイル達が案内されたのは三階のテラス状の席で、眼下の水路では観光客を乗せた小舟が行き交っていた。

「ふむふむ、中々の品ぞろえじゃの」

十人は席に着けるだろう大きなテーブルには、シルドニアが文字通りメニューの端から端まで片っ端から注文した料理が所狭しと並んでいる。

大河の中州という特別な立地条件に相応しく、川魚や貝などの料理が多いが、流通の盛んな商業

都市でもあるので、珍しい食材や調理の仕方を取り入れた料理もある。

「何だこれ？ ……魚？ それも生か？」

そのうちの一つ、白身魚と思しき切り身を、眉根を寄せたセランがつつく。

「確か……サシミだったか？ 新鮮な魚の切り身に特製のタレをつけて生で食べる、東方の島国の料理だそうだ」

カイルが思い出しながら答える。

「魚を、生のままでか？」

果物や一部の野菜以外、生で食べる習慣のない地で育ったセランが、信じられないという表情になった。

「あそこは変わった食べ物が多いらしい。他には発酵した豆をライスに載せて食べる、なんてのもあるようだ」

「……俺は絶対そっち方面には行かねえ」

食文化の違いにちよつとしたカルチャーショックを受けているセランをよそに、リーゼが思い出したように尋ねる。

「あ、東と言えばミナギはどうしてるの？」

話題に上った東の島国出身のミナギ。一応旅の仲間なのだが、基本的に別行動をとっており、必要とき、それもほぼカイルの前にしか姿を現さない。

「いつも通り、別行動中だ」

ミナギは先行してこの都市に来ており、情報収集などを行っていた。間もなく向こうから連絡を寄越してくるだろう。

「そっかあ……たまには一緒にご飯を食べたいんだけど」

少し不満そうにリーゼが言う。

「言っただろ、ミナギは俺達と一緒にいるところを見られたら動きにくくなる」

ミナギの役目はあくまで裏方で、仲間と思われていない方が都合がよく、このような人目につくところで一緒にいる訳にはいかないのだ。

「理屈は解るんだけど……」

食事は大勢で食べた方が美味いのに、と口を尖らせるリーゼ。

リーゼをはじめは、裏仕事専門で暗殺すら行うという彼女にどう接していいか解らなかったようだったが、その人となりを知り、特に共に戦う経験を過ごしてからには積極的に関わろうとしていた。今ではむしろ、ミナギの方が戸惑っているぐらいだ。

「ふおれ、ふあふえつふえふおふあんふえ、ふあつふあふおふあふえんふあ」

「だから口に物を入れたまま喋るなよ……」

希少な香辛料を惜しげもなく振りかけて香草を巻いた肉を頬張り、リスのように口を膨らませたシルドニアが何かを言うが、カイルは全く聞き取れなかった。

そうした騒がしいとすら言える食事が一段落した頃、デザートに手の込んだ色とりどりのケーキが運ばれてきて、女性陣は目を輝かせる。

「うむ、果実の自然な甘さとは違う濃厚さがあるな」

生クリームをふんだんに使ったケーキにホールごとかぶりつきながら、うんうんと満足気な声を出すシルドニア。

「あたしはどちらかと言えば果物の自然な甘さの方が好きだけど、これも美味しいわね……あ、香り付けにココの実を使ってるんだ。こういう店で食べるのって、勉強になるわね」

リーゼはフルーツケーキに興味深げに観察し、匂いも楽しみながら食べている。

「どっちもいい……」

実は食いしん坊で、甘い物が特に好きなウルザは、普段の毅然^{きげん}さが微塵^{みじん}も感じられない半ば恍惚^{こうこう}とした表情を浮かべながら、チョコレートケーキを口に運んでいた。

このように女性陣が揃ってほわんとした顔でケーキを堪能する一方、それほど甘党ではないセラシとカイルはこれからどうするかの話に集中している。

「で、この後は……確かクラ何とかいうおっさんと会ったっけ？」

「クラウス・マルニコだ。有名人だぞ」

全く興味がないと言わんばかりのセラシに、カイルは一般常識にすら近い人名を挙げた。

クラウス・マルニコは、元はこの都市出身のただの船乗りに過ぎなかったが、自ら立ち上げた商会を一代で世界最大規模にまで発展させた立志伝中の人物であり、いわば商人の英雄だ。彼の名は下手な王様よりも知れ渡っている。

そのマルニコ商会の本拠地はここバヨネにあり、実質この都市を支配していた。

「でも、結構なお偉いさんなんだろう？ 会えるのか？」

「ああ、事前に手紙を送っているが、愛想いい返事が来たよ」

既に約束は取り付けてある、とカイル。

「ふうん……まあどっちにしろ、おっさんなら俺には関係ないし、興味ない」

セラシはフルーツの盛り合わせの中から比較的甘くないものを取って齧^かり、どうでもいいといった具合に返す。

「お前にとってはそんなところだろうな」

カイルもお茶を飲みつつ、手にした紙に目をやっている。

「ん？ それなんだ？」

「さっき立ち寄った配達ギルドで受け取った手紙だ」

配達ギルドとは文字通り、手紙や荷物などを配達する組織である。この大陸は、古代魔法王国ザーレスの時代に作られた街道が今もしっかりと残っており、交通の便がよい。そのため組織の配達区域は人族領の大部分を網羅^{もろ}しており、多くの人が利用していた。

追加代金を払えば結構融通を利かせられるため、カイルは自分宛ての手紙がここまで届くようにしていたのだ。

「今読んでいるのは……エリナからの手紙だ」

「エリナか？ 私にも見せてくれ！」

ケーキの甘さで顔が蕩^{とろ}けていたウルザだったが、エリナの名を聞くと、はっとしたように身を乗

り出してくる。

カイル達は以前訪れたエッルス国で、ダークエルフの父と人間の母を持つエリナと出会い、ダークエルフ、ドラゴン、魔族、そしてメーラ教が複雑に絡み合った事件を共に解決した。エリナはできればカイル達の旅についてきたかったようだが、療養中の母親ルクテラが完全に回復するのにまだ数か月が必要だった。結局彼女はエッルスに残ったものの、こうして手紙のやり取りを続けていたのだ。

手紙の内容は主に近況報告で、それによるとルクテラはほぼ快癒したとのことだった。また懇意にしているダークエルフ、パセラネの尽力のおかげで、母子揃って父親の墓参りができたなど、疎遠になっていたダークエルフ一族との関係も徐々に改善しつつあるらしい。

「そうか……」

手紙の文面からその喜びが伝わってきて、ウルザは目を細めてどこか安心したような笑みを漏らす。

「あとは……ゴウからの報告もある」

「なに、ゴウからか」

今度はシルドニアが興味深げに身を乗り出した。

ゴウは鉱山都市カランに住む魔技師マジシと呼ばれる魔道具マジツグイテムの専門家だ。現在はカイルをスポンサーに、ザールス時代の強力な人型魔道兵器、ゴーレムの復元を目指している。

過去、シルドニアはゴウに魔道具に関する指導をしており、ちょっとした師匠気分なので、彼の

様子が気になるのだろう。

「で、なんじゃと？」

「ああ、復元は順調らしい。全工程の約半分は終えたとのことだ」

「ほう、思ったより早いな。まあ素質はあつたし、環境もいいとなれば捗はかどるというものか」

シルドニアはうんうんと、感心した声を上げる。

ゴウはカランの都市長ガザスの義理の息子であり、また実質的な支配国であるジルグス国の大使ミランダからも全面支援の約束を取り付けている。それだけ権力者のコネがある状態ならば、研究のための色々な融通も利くことだろう。

「まあ費用は湯水のように使っているらしいがな」

今回寄越してきた報告には予算の追加要請もあり、城が買えそうな要求額を見たカイルが苦笑して言った。

かといって、それに関して文句を言うつもりはなく、むしろ必要ならいくらでも出すつもりだった。

「ただなあ……」

手紙を見ながら、カイルが顔をしかめる。

確かに順調らしいのだが、報告書の中で段々と不穏な言葉が目立ってきているのが少々気になっていた。

例えば「やはり機能美だけでなく造形美も追求すべきですよね!」「効率と美意識、両立させて

みせます！」などと力説しているのだ。

前世の魔族との戦いで人族の大きな戦力となったゴーレムは、武骨で無機質なだけで造形美などはカケラも感じさせない、かろうじて人型と言える程度の形状だった。「造形美」「美意識」などの言葉は明らかに、カイルの知っているものには似合わない。

「あいつは……何を作ってるんだ？」

頭痛がしてきたのか、眉間を指で揉みながらカイルが言う。

「ふむ、まあただ優秀なだけなら真面目でもいいが、所謂天才はどこか突き抜けたところがあるものじゃ。ゴウもその類じゃろうな。安心せい、過程はどうあれ奴は結果を必ず残すであろう………多分」

手紙を覗き込みながら、シルドニアが一応のフォローをする。

「だいたいんだがなあ……」

不安そうに天を仰ぐも、この件はゴウに一任するしかない。とりあえず深くは考えないことにするカイルだった。

2

食事を終えたカイル達は、せっかくなので水路を利用してマルニコ商会へ行くことにした。

早速観光客用の小舟を借り、船頭に場所を伝えて、ゆつくりと船に揺られる。

「なるほど、観光都市の名は伊達ではないようだな」

ウルザが周りの建物を眺めながら感心したように言う。

「バヨネは昔から商業都市として栄えてきました。交通の便がよく物が集まるということは人も集まりやすいということで、それが発展して観光都市にもなったんですよ」

船頭が滑らかな口調でバヨネの由来を説明していく。確かに、現代と違う建築様式は目を引き、水路から眺めると特に栄えて見えた。

大荷物を運ぶのに最も適しているのは船である。チグテス河の支流は人族領のかかなりの範囲に広がっており、それを利用した船による人と物の運搬は、流通の要となっている。

「そうなんだ……あ、あの塔って何か傾いてない？」

「ふむ、あれは錯覚を利用してそう見せておるだけで、実際には垂直じゃな。あれも名物になっておるようじゃ」

珍しい物を見て無邪気に喜ぶリーゼに、得意気に説明するシルドニア。皆が皆、観光都市を楽しんでいるようだだった。

非常にゆつくりと進むカイル達の船。水路上には同じような小舟の土産売りや花売りがおり、着飾った売子の子の少女達が手を振りながら笑顔を投げかけてくる。

愛想よく女の子に手を振り返して応えていたセランが、笑顔を崩さぬまま、カイルにそつと小声で告げた。

「気付いてるか？」

「ああ、見られているな……どこからかは解らないが」

自分達を見張る何者かがいる——カイルも正面を見据えたままで応える。

この街に来る途中の客船で向けられた好奇の目ではなく、明らかに何らかの目的を持つ監視の視線を二人は感じていた。

「素人じゃないな、だが監視しているだけで、手を出してきそうにはねえけど。心当たりはあるか？」

「さてな……思い当たるのがいくつかあって、どれか解らん」

少し考えただけでも、ガルガン帝国やジルグス王国、メーラ教など心当たりが多々あるのだ。

「人気があつて羨ましいな、おい」

「何なら代わつてやろうか……ここらでいい、後は歩いていく」

他人事のように呑気なセラン。カイルはため息をつき、船頭に船を止めるよう伝えた。

料金と多めのチップを払った後、カイル達は予定より早く小舟を降りる。

通りもやはり観光客や彼ら相手の店が並び、賑やかな有様だ。約束の時間にはまだまだ余裕があるので、それらを冷かしながら歩き始めた。

船を降りた後も、監視する気配は消えず、カイル達を狙っているのは間違いないさそうである。

（ただ敵意はないようだし、ただ見張つてただけだな……）

誘い出して正体を突き止めるかとも考えたカイルだったが、とりあえず害はないので放つておこ

うと判断した。

（もう約束の時間だしな。揉め事で遅れて印象を悪くするのもまずい）

カイルは頭を切り替え、今から会うクラウスについて考える。

クラウスは一介の商人でありながら世界規模の影響力を持ち、この都市の支配者とも言える人物。カイルが彼に会う目的は当然、『大侵攻』に備えるためだ。

戦時下では物流のほとんどが寸断されたが、マルニコ商会のネットワークだけは辛うじて生きていた——それでも少しの延命に過ぎなかったが。

同じ轍を踏まぬよう、今回は物資の備蓄や流通の確保などを事前に手配しておきたかった。そのためにはマルニコ商会の協力が必要なのだ。

（問題は、どこら辺まで打ち明けるかだな）

商人なら、儲け話だと言えば乗ってくるだろう。だが、戦争への備えとなるとかなりの大規模な準備が必要で、なんのための取引なのか不審にも思われる。

ある程度予測は立てているものの、突っ込んだ質問をされた際にどう答えるかが問題だった。

そんなことを考えながら最後尾を歩いていたカイルの少し後ろへ、ピタリと張り付くように、あくまで自然な動きで人影が現れる。

それはフードを被り顔が見えにくい、カイルス神の巡礼者——に扮したミナギだった。

「振り向かないで……気付かれたくない」

この「気付かれたくない」は、周りの通行人ではなく、前方でわいわいと楽しげな声を上げなが

ら店の商品を物色しているリーゼ達に對してだ。

リーゼ達は今のところミナギには気付いていないので、カイルはそのまま少し離れた露店をのぞくふりをして皆から離れた。ミナギも横に来て、周りに気付かれないよう小声で話し始める。

「ふう……あの娘、なんで私なんかにかまおうとするのかしら」

ミナギはため息をつきながら、獣が魚を喰^くえているというよく意味の解らない民芸品を手につけて笑うリーゼをちらりと見る。

何とかしなさいよ、と文句を続けるが、カイルは軽く流す。

「そういう性格なんだ、諦めてくれ……で、何か解ったか？ クラウスに後ろ暗いところはあるか？」

ミナギの役目はマルニコ商会、及びクラウスについて調べること、できれば交渉を有利に進められそうな材料を見つけるのが目的だった。

材料と言えば聞こえはいいが、要はつけ込める弱みはないか探っていたわけだ。

「残念ながら解らなかった……と言うより調べきれなかったわ」

少し悔しさを滲ませてミナギが首を横に振ったので、カイルはまさかと驚いた。

この手の情報収集はミナギの得意とするところで、解らなかったという返事が信じられないのだ。

「とにかく防諜に力を入れているの。使用人は下働きに至るまで口が堅いし、警備も厳重で下準備なしでの侵入は無理……言い訳にしかないけど、とにかく時間がなかったわ」

ミナギがバヨネに來たのは三日前で、結局噂以上のことは解っていないかった。

「ただ、あの警戒ぶりはちょっと異常よ。情報を重視しているだけかもしれないけど、よっぽど知られてはまずいことがあるのかも……もうちょっと調べたかったわね」

不満そうなミナギ。ほとんど成果を出せなかったのがプライドに障^{さわ}ったのだろう。

「なるほど……いや、充分だ。少なくとも用心深い性格であることは間違いないようだしな。今回は会ってすぐどうこうしたいのではなく、とりあえず顔を繋いで、どういった人物かを見定めるのが主な目的だし」

クラウスが用心深い人物だと解っただけでも収穫だった。

「あと、気付いているとは思うけど、今カイルを見張っている奴はマルニコ商会の配下よ」

「そうか……これも単に用心深いのか、それとも他に何か目的があるのか？」

「まあ、良くも悪くもカイル達は目立つから」

考え込むカイルにミナギが軽く笑う。

「いざとなったら切り札の脅……じゃない、交渉材料もあるから、大丈夫だとは思うが」

「脅迫材料って言おうとしなかった？」

物騒なことを平然と言うカイルを、ミナギは三白眼になって睨む。

カイルの記憶では、今から約一年後、マルニコ商会は大問題を起こす。

宗教国家であるスーラ聖王国において、高位聖職者に多額の献金をしていたことが発覚するのだ。有力者に献金をして商売上の便宜を図ってもらおうというのは、他国ならばそう珍しいことではないが、こと清廉^{せいれん}を旨とするスーラ聖王国でこの手の行為は厳禁となっている。

人族で最も信仰されている大地母神カイルスの聖地を持つスーラ聖王国は、国土こそ小さめだがガルガン帝国とは違った意味で世界中に影響力を持つ。この醜聞は人族領中に知れ渡り、辺境のリマーゼにも噂が届いたくらいだった。

献金は長年にわたって行われていたそうだから、今頃も既に関わっているだろうとカイルは読んでおり、必要とあればその話をちらかせてみようと考えていた。

「……いつも思うけど、そういった情報をどこから手に入れてるのよ」

不審げな声で問うミナギに、カイルは平然と答える。

「依頼主と認めた相手の余計な詮索はしない、それがミナギ達シノビの掟だろ？」

「そうやってすぐ誤魔化す……」

不満そうにミナギは口をとがらせるが、シノビの職業倫理を持ち出されては黙るしかなかった。

「ああ、それともう一つ。商会だけど、ついさっきから妙に慌^{あわただ}しくなっているわ」

「慌しい？ 何か問題でも起こったか？」

「詳細は解らないけど、まるで予期せぬ事態に陥ったみたいに混乱しているの」

「……だとすると、今日は会えないかもな」

カイルは顎に手を当てて考え込むが、それも仕方ないというなる。

会う約束こそ取り付けていたが、相手は多忙の身。トラブルが起きたというのであれば二、三日くらい待つのも計算のうちだ。

「まあ、とりあえず行ってみるよ」

「そう……せいぜい気を付けなさい。普通の商人と違うのは間違いないさそうだな」

ミナギはそう言うと言もなくカイルから離れ、次の瞬間には雑踏の中に溶け込んでいた。

その後カイル達は、出店を冷かしつつ、ゆっくりとマルニコ商会の本店がある街の北部へと向かう。

周りの建物が段々と、歴史を感じさせる建築物から新しくて実用的な倉庫になり始め、観光地区から商業地区となったのが見て取れた。

道行く人々も、観光客から水夫や荷運びの労働者へと変わってきている。

そしてとうとう、この都市で最も重要であろう、五階建ての石造りの建物が見えてきた。

「あれが目的地か。でも何か様子が妙じゃの？」

シルドニアが首を傾げて言った。

マルニコ商会の本店は、この都市で一番大きな船着き場に面しており、そこには大小様々な船が停泊している。

建物の正面は積み荷を置くための開けた場所なのだが、従業員達はその荷物を大慌てで片付け、掃除をしている。

それはまるで、少しでも見苦しさをなくそうとする努力のようだった。

「……今から重要人物でも来るみたいだな。それも予定外の」

セランが何か嫌な予感がすると言う。おそらくそれは合っているだろう。

「うわあ、おっきな船」

そのとき、リーゼの言葉通り、ひと際目立つ大型船が船着き場にゆっくりと入ってきた。

それは本来なら外洋に出るための規模の帆船であり、チグテス河のような大河とはいえ、これほどの船はそう見られない。

また造りも派手で、帆先に備えられた航海の女神アグレイの黄金像をはじめ、細部に至るまで見事に飾り立てられている。

そして何よりも目立つのは、帆に染め上げられた、盾に絡みつく黄金の蛇の紋章——ガルガン帝国の紋章だった。

接舷した帆船から栈橋に舷梯^{げんてい}が架けられると、すぐさまガルガン帝国の騎士達が駆け降り、周囲の警戒にあたる。続いてゆっくりと降りてくるのは、ガルガン帝国の現皇帝ベネディクスの末娘、皇女アンジェラだった。

相変わらず、ただ歩いているだけ、そこにいるだけで大輪の薔薇^{ばら}を連想させるほどの華やかさを持った、生まれながらの皇女である。

「うげ……やべ」

苦い声を上げたのは、以前帝国で出会ったときからアンジェラに妙に気に入られているセランだ。慌てて隠れるようにカイルの後ろに移動する。

セランは自他ともに認める女好きだが、人族最大勢力の帝国の皇女に気に入られても困るだけだった。下手な対応をしようものなら、命がいくつあっても足りないからだ。

「……もう遅いぞ、こっちに手を振っている」

満面の笑みで手を振るアンジェラを見て、ウルザはセランに諦めるとばかりに言った。

「人気があるんだな、羨ましい限りだ」

「……なら代わってくれ」

さっきのお返しのようなカイルの軽口に、頭を抱えるセランだった。

3

「皆様方！ まさかこのような所でお会いできるなんて、嬉しい限りです！」

駆け寄ってきたアンジェラは、親しげな笑みのみならず身体全体で喜びを表現する。

身に着けた豪華な赤のシルクドレスは彼女によく似合っており、彼女自身の所作とも相まって、生まれ持った気品が全身から滲み出るかのようだ。

「ご無沙汰しております」

カイルは約半年ぶりの再会となるアンジェラに頭を下げる。

「ご活躍は私の耳にも届いています！ 特に村々を襲い、数多^{あまた}の冒険者を喰らい、エッドス国を滅ぼしかけた邪悪なドラゴンを、完膚なきまでに倒したという英雄譚^{えいゆうたん}！ これを聞いたときには心が震えましたわ！」



大分尾ひれがついた噂について、アンジェラは目を輝かせながら熱く語る。

「かなり話が盛られてるわね……」

「グルードが聞いたら怒り狂いそうじゃの」

リーゼとシルドニアがひそひそと話す。

アンジェラはひとしきりカイルを褒め称えた後、後ろの方なるべく目立たないようにしていたセランに目をつけた。そして、カイルに向けていたのとは少し種類が違う笑みを満面に浮かべ、足取りも軽く近づいていく。

「セラン様♪ セラン様もお変わりなさそうで何よりです。ご活躍の方も伺っておりますわ」

今度はどこか猫を連想させるアンジェラに迫られ、セランは明らかに腰が引けている。

それに対してアンジェラの方はたとえば、今にも抱き付きそうな勢いだった。

「いやいや、俺はオマケみたいなものだから。そういったことはカイルの方に……」

「いえ！ 私は自分の眼と直感を信じておりますので……今回はつまらない公務かと思っておりますが、皆様がここにおられると聞いて来るのを楽しみにしていました」

元々カイル達は目立つようには行動していたので、足取りを辿るのは簡単だっただろう。

そしてアンジェラの中では、このバヨネに滞在する間はカイル達に同行すると決まっているようだ。

「さあ行きましょう。目的は同じだと聞いておりますので」

アンジェラは大胆にもセランに腕を絡ませ、引つ張るようにして商会の本店へと歩き始めた。皇

女の奔放な行動を諫める立場の者はいないのか、周りのお付きの侍女や騎士は口を挟むことはなく付き従う。

そんな二人の後ろ姿を見ながら、リーゼが少し不思議そうに言った。

「でも、珍しくない？ あんな可愛い子に迫られてるのにセランが乗り気じゃないなんて」

「そりゃいくらあいつでも、ガルガン帝国の皇女になって好かれても、厄介以外の何ものでもないだろ」

小声でカイルが答えるが、リーゼは納得できないようだ。

「そう？ あいつならそんなの気にしないと思うんだけど……何かそれだけじゃない気がするのよね」

何か違和感を覚えつつ、自分でも上手く説明できないリーゼは、意を決してアンジェラに話しかけようとした。

「えっと……」

リーゼが言葉を選んでいると、アンジェラが笑顔で振り返りながら言う。

「ああ、言葉遣いはお気になさらずに。私は皆さんともっと親しくしたいと思っておりますし、私も気軽に話しますので」

少なくともこの言葉が本心であるのは、リーゼにも解った。

「じゃあお言葉に甘えて……今日ここに来た目的は何ですか？」

「帝国とバヨネの友好を深めるための親善大使です。表向きは」

「そ、そうですか……」

親善は建前、とはつきりと言うアンジェラに、リーゼは愛想笑いをするしかなかった。

「表向き……では、クラウス会長に会う目的はやはり？」

強硬な拡大路線をとり、最終的には人族統一国家を目指すガルガン帝国の皇族が、独立している商業都市を訪問する理由など大体想像はついていたが、カイルは一応という感じで聞く。

「ええ、我がガルガン帝国はこのバヨネを、正確にはマルニコ商會を支配下に置きたいと思っております」

だがアンジェラははつきりと答えた。その狙いが公然の秘密とはいえ、皇族の口から直接言われてしまうと、尋ねたカイルの方の顔が強張ってしまう。

「ここバヨネはお兄様達も重視しております。ただマルニコ商會は、ガルガン全体の流通の五分の一に何らかの形で関わっています。そんなお得意先を武力併合してはこちらにも被害があり、肝心の旨みも激減してしまいます。ですので対応は慎重にならざるを得ず、クラウスもそれが解っているのです、のらりくらりとこちらの要求を躲けているというのが現状です」

厄介な都市です、とアンジェラは頭を横に振る。

「今のところは時々こうして約束を取り付けずに訪問して、向こうに何かしらの失態があつたらそれを因縁……ではなく交渉材料にしていこうと、地道に外交努力を積み重ねているところです」

「そ、そうですか……」

流石にぶつちやけすぎだと内心突っ込むも口には出せず、リーゼと同じように愛想笑いをする

カイル。

「とにかく何か弱みがないか探っている最中です。とりあえず今回の訪問も、特に用はなかったのですが……こうして皆様とお会いできるなんて、退屈な公務にあつて予想外の喜びです」

そう言うアンジェラは本当に楽しそうだった。

ガルガン帝国の皇族と誼よしみを通じるのはカイルにとってもマイナスではないし、逆に機嫌を損ねる訳にもいかない。

これからクラウド会長に会うのに、アンジェラとの同行が吉と出るか凶と出るか解らないが、こうなった以上は覚悟を決めるしかなかった。

アンジェラを先頭にして一行がマルニコ商会の本店の大玄関をくぐると、綺麗に列を成した従業員が迎える。

その列の最奥には、深々と頭を下げている人物がいた。

「ようこそお越しくございました、アンジェラ様」

クラウド・マルニコ。人族の経済の頂点に立つ人物がそこにいた。

若い頃は船乗りだったというだけあつて、少し色黒のしわ深い顔立ちながらも背筋はしゃんとしていて、足取りも確か。年は六十前後のはずだが、十は若く見えた。

「お出迎えにも上がれず、申し訳ございません。いやはや、このような急なお越しでなければ歓迎の式典おひらけも催せたのですが」

クラウドがまずは軽い嫌味とばかりに言う。顔は満面の笑みなのだが、言葉の端々で歓迎していない客だと訴えていた。

「あら、私と貴方の仲でそんなお気遣いは無用だと解っているでしょう？ それに貴方が用件を呑んでくれれば、こう何度も足を運ぶこともないのですけど」

一方のアンジェラも、クラウドの嫌味など歯牙にもかけずに笑顔で返事をする。そんな二人は軽く声を上げて笑い合った。

その白々しさにカイルは、やはり同行は凶だったかな、と内心でため息をついた。

「しかし、本日来るとは聞いていましたが、まさか一緒に来たとは予想外でしたな……ようこそ、カイル様」

クラウドはカイル達に目をやり、少し驚いた素振りを見せた後、改めて挨拶をする。

「初めまして、カイルです」

カイルもまた頭を下げた挨拶をする。

「ええ、私の大事な友人達です」

アンジェラが自慢げに言う。

「なるほど、流石は『竜殺し』の英雄ですな。アンジェラ様とご友人とは……」

クラウドはうんうんと感心したかのように言った。

「では申し訳ありませんが、しばらくお待ちいただき……」

「ああ構いません、彼らも一緒に」

「しかし……よろしいのですか？ 彼らは帝国の関係者という訳ではないのでしょうか？」

アンジェラの言葉に、クラウスは少し難色を示す。これからの会談は実質国同士の外交にあたり、無関係の人物を入れるのは好ましいことではない。

「ええ、どうせ用件はいつも通りですのうで」

アンジェラがニコリと笑う。それは美しい笑顔なのだが、どこか不敵な肉食獣の舌なめずりを連想させるのだった。

カイル達を通された部屋は広く豪華で、クラウスの富を強く実感させた。

特に目立つのは足元の絨毯。毛並みの見事さで有名な、巨熊の魔獣ヴァイオレットベアの紫の毛皮で出来たそれは、足を下ろすのを躊躇^{ためら}わせる美しさだ。

その他の調度品も見事なもので、根が小市民のリーゼなどは雰囲気^{ふんぎ}に気圧されたのか、身体が半分沈み込むほど柔らかいソファに座ったまま、落ち着きなく周りをきよきよと見ている。

ただそんな殊勝とも言える態度なのはリーゼくらいで、シルドニアは席に着くなり用意されていた菓子類に飛びつき、セランもそれに続いた。

ウルザも表情を変えずにお茶を飲むなど、全くいつも通りだった。

カイルはそんな仲間達の図太さを心強く思いながらも、頭を下げてクラウスに非礼を詫^{わづ}げる。

「申し訳ありません、自由な連中でした」

「いやいや、頼もしい方達ではないですか」

クラウスも鷹揚^{おうよう}に笑い、お気になさらず、と度量の大きいところを見せる。

アンジェラもその様子を微笑ましそうに見ていたが、すぐに居住まいを正し、用件を切り出した。「さて、それでは本題に入りましょう……クラウス会長、今回こそいい答えを聞かせていただけるのでしょうか？」

「はて、いったい何のことでしょうか？ アンジェラ様の訪問の目的は、我々と帝国との友好を深めるといふことのはず。それでしたら全面的に協力いたしておりますが」

クラウスはあくまでとぼけるが、アンジェラも構わず続ける。

「あなたには伯爵の地位を用意しています。領地もこのバヨネのままとしますので、いい加減に受け入れてほしいのです」

アンジェラ——ガルガン帝国の要求は単純で、クラウスを帝国の貴族として迎え入れ、このバヨネを帝国の支配下に置くことだ。

「……まず根本的な問題といたしまして、このバヨネは私が支配している訳ではなく、合議制をとっていると御存じのはずです」

このクラウスの言葉通り、バヨネは商人の都市らしく代表二十名による議会によって運営されている。当のクラウスはその議長を務めていた。

「私は確かに議会の代表ではありますが、あくまで代表でしかありません。もし私が帝国に従うなどと提言すれば、あつという間に解任されます」

自分の力など大したことはない、クラウスは首を横に振りつつ身振り手振りを交えて謙遜^{けんそん}する

が、アンジェラには通用しなかった。

「おとぼけにならなくて結構です。バヨネの舵取りをしているのは貴方で、その気になれば他の有象無象を押さえつけるなり排除するなり、そんなことは造作もないでしょう？ 現に貴方の方針に反対してバヨネに損害を与えた者は、色々な形でいなくなっているじゃないですか」

「色々」の部分に微妙にアクセントをつけつつ、アンジェラは手で口を隠すように笑うが、その目は笑っていないかった。

「まあガルガンでもよくあることですから、それについてどう言うつもりはありませんが」

「確かに。昨年だけで何人もの帝国貴族の方々が、色々な形でいなくなりましたな」

クラウスも「色々」の部分を微妙に強調して笑みを浮かべた。

「ふふふ、ほんの少し分を弁える……こんな簡単なことができない者が多くて困りますわね」

「ははは、まったくですな」

二人の乾いた笑いが室内に響き渡る。

「すっげえな……さっきから二人ともずっと笑顔だが、全力で戦っているときと同じくらいの気迫だ」

「これが人間の会談か、物騒極まりないな……」

室内の空気がまるで音を立てているかのようにギスギスする中、セランとウルザがひそひそと話す。

「その点、貴方は賢明だと信じています。それに私達は全てを明け渡せと言っている訳ではなく、

あなたには商会の長として実権を握っていただいたままの上で、全面的に後押しします。勿論帝国の利益になるのが大前提ですが、権限は大きく与えるつもりですので、自由に活動できますよ」

アンジェラはスツと目を細め、声色を変え、流れるように話す。

「これは貴方個人にとつても、商会にとつても利のある話のほずです。ガルガンに従えば他の競合相手を排除して流通を完全に掌握、独占できます……貴方は世界で一番の商人ではなく、世界で唯一の商人になることもできるのですよ？」

蠱惑的ともとれるアンジェラの誘いの言葉。だがクラウスはゆっくりと首を横に振るだけだった。「アンジェラ様、商売というものは、特定の者が独占してはいけません。相手がいて成立し、競い合う者がいてこそ発展します。国が金と物の流れを完全に牛耳っては、いずれ淀み、腐敗していくでしょう。そうならないように、自由な流れを作らねばならないのです」

クラウスの言葉からは、経済の頂点に立つ者の重みが感じられた。

だがそのクラウスを真つ向から叩き斬るかのようにアンジェラは言い放つ。

「ええ、勿論解っています——ですがそれは帝国の方針とは相いれません。発展よりもまずは統制です。理想としては、かつての魔法王国ザーレスの如く、人族を完全に管理下におくべきなのです」

「いや、そこまで支配しておった訳では……もがっ」

思わず口を挟みそうになったシルドニアの口に、カイルは菓子をつ突っ込んで黙らせる。

「しかしそれでは、長い目で見れば帝国そのものの発展を妨げることになります。そこについては

いかがお考えなのですか？」

そのような真似をしては、たとえ人族を統一しても、先は長くない。だがそれが解らないはずもないでしょう、と苦言を呈するようにクラウスが言う。

「あら、何か勘違いしていませんか？ ガルガン帝国の国^{こく}是^{こゝ}は人族の統一ですが、それは過程でもあります。最終的には——大陸の西の統一も含まれているということです」

大陸の西、それはすなわち、魔族領のことを示していた。

「まさか……まさか魔族に戦争を仕掛けるおつもりなのですか？」

流石にクラウスが顔色を変える。

魔族に対して戦争を仕掛ける。これが他の人物が言った言葉ならば荒唐無稽なほら話と笑うこともできるが、ガルガン帝国の皇女の言葉となれば話は別だ。

真実なら、それこそ世界を巻き込むどころか、歴史に永遠に残る大戦争になる。

「しかし、魔族はここ何百年と人族に対して無干渉です。なのにこちらから手を出して刺激するのは無益では……？」

藪^{やぶ}をつついて蛇を出すことはない、クラウスはそう言っているのだ。

「あら、人族を滅ぼす可能性のある魔族を放置しておくことの方が問題では？」

アンジェラの物言いには哑然とする者は多かったが、カイルだけはうんうんと頷いていた。

「まあ、それはあくまで最終目的として、魔族をどうこうというのは最低でも人族を完全統一してからになります。そのためにも経済を完全に掌握する必要がある、だからこそ貴方の力が必要な

です、クラウス会長？」

お願いしますね、とアンジェラは余裕の笑顔でお茶を飲みながら言った。

これですっかり怯^{ひる}んでしまったクラウスから会話の主導権を握ったとばかりに、この後もアンジェラはぐいぐいと迫り続け、クラウスを翻弄^{ほんろう}していった。ガルガン帝国皇女として、幼い頃からこういった交渉の場での話術を学んできた成果だろう。

だがクラウスもクラウスで、やや押されつつあったのは確かながら、経験してきた場数の差からか何とか踏みとどまり、話は結局平行線のままとなった。

しばらくして、時間切れとばかりに残念そうにアンジェラは言う。

「……仕方ありませんね、今日のところはこれで終わりです」

アンジェラにはこの後の予定がある。クラウス以外のバヨネの有力者にも会わねばならないのだ。「正直クラウス以外は十把^{じゅうば}一絡^{ひとから}げの価値しかないのですが、無視する訳にも参りませんので……」

アンジェラは本当に面倒そうに言った。

流石にそこまでカイル達を付き合わせるつもりはないらしく、元々クラウス会長との面会の約束を取り付けていたカイル達を置いて去ることになった。

名残惜しそうにしながら、今晚食事でも、とカイル達との約束を取り付け、アンジェラは席を立つ。

「ただクラウス会長、譲歩もそろそろ終わりです。私個人としましては貴方を嫌いではありません

が、帝国としては時間切れがあることもお忘れなく」

最後にしっかりと釘を刺し、アンジェラはそれでは失礼と手を振りながら部屋を出ていった。室内に満ちていた張りつめた空気が弛緩^{しかん}すると、クラウスだけでなくカイル達も大きくため息をついた。

「やれやれ、帝国にも困ったものですね」

クラウスは苦笑いを浮かべたが、もう余裕の態度を回復している。

だが実際、最終通告ではないにしろ、それに近い状態なのだろう。だからこそアンジェラもかなり深いところにまで踏み込んで、帝国の迷惑を聞かせ、本気度を見せたのだ。

これから先の帝国とバヨネの関係を考え、カイルはどう返答したものかと考えていた。だが今の話はもう終わりとばかりに、クラウスが笑顔で話しかけてくる。

「さて、お待たせしましたな。いやいや、会えるのを楽しみにしていたよ」

クラウスは先ほどまでの舌戦での雰囲気は微塵も感じさせず、くだけた口調で好々爺^{こうこうや}の笑みを浮かべている。

「想像していたより若いな。いや、だからこそと言うべきか……いや、若さというものは素晴らし。この年になるとそれをつくづく実感するよ」

「ありがとうございます。名高いクラウス会長にそこまで言っていたけるとは、嬉しい限りです」

社交辞令だろう賛辞に、カイルも当たり障りのない返事をして頭を下げる。

今回の目的はあくまで顔繋ぎで、この後は適当な談笑でもして、それで終わり——そう思っていた。

だが、次のクラウスの言葉に首を捻ることになる。

「……君には何としても会わなければいけなかったからなあ」

何やら含みを持たせた表情と物言いのクラウスに、カイルは疑問を抱く。

「あの、何故そんなに私に会いたかったのでしょうか？」

カイルにとっては好都合なのだが、ここまで自分に会いたい理由が解らず、問うてみる。

今のカイルにとりあえず会いたいという人物は多いが、クラウスの場合、どうも明確な目的があるように思えた。

「僕は商人だよ。無論商売が、儲けが絡んでいるさ」

クラウスは歯を見せて笑う。

その笑みに、カイルの背中に嫌な予感が走った。今までの経験からか、それは当たっていると何か確信できた。

「……と言っても、直接君と商売をしたいというのではなく、あるお得意様からの依頼でね、仲介を頼まれた」

「仲介？」

「ああ、君に会いたかったので、場を用意してほしいとのことだった。色々と事情のある方でね。あまり目立たず内密に会いたいそうなのだよ」

「それはいつたい誰の……」

「直接会ってもらった方が早いだろう。実はもう来ているのだよ」

口を挟もうとするカイルを遮ってそう言うのと、了承すらとる前に、クラウスは控えていた使用人に客を連れてくるよう命令を出す。

こちら辺の強引さはやはり百戦錬磨の商人の手腕と言うべきか、すっかりクラウスのペースになっていた。

「なに、既に顔見知りということだから、話も早いと思う」

「はあ……」

顔見知りというのなら直接会いに来ればいいのにと、カイルは訝しげな顔になる。が、クラウスはただ笑うばかりだった。

少し待った後、扉が開く。そして入ってきた人物を見て、カイル達は思わず絶句した。

肉感的な美女で目立つ容貌だが、何より目立つのはその額から生えている魔族の証^{あかし}の角だった。

「……確かに顔見知りだな」

セランが何とも言えない顔で、魔族の女——ユーリガを見た。

4

「どういうことだ!？」

反射的に剣の柄に手を伸ばしかけたカイルに対し、ユーリガは平然としたままだ。

カイルはいつでも動ける準備を整えて周りを警戒しつつ、クラウスとユーリガを更に問い詰めようとする。

「ユーリガじゃない！ 元気にしてた？」

だが緊張が走ったのはカイルのみのように。リーゼに到っては、思いがけず旧友に会ったかのような反応だった。

無警戒に近寄ろうとするリーゼを、カイルは慌てて止める。

「不用意に近づくな、罨^えだったらどうする！」

「そんなはずないでしょ。もしユーリガに戦う気があるなら、こんな堂々と現れないで不意打ちとかするに決まってるじゃない」

リーゼの至極当然の突っ込みに、カイルは返事に詰まる。

セランやウルザも油断はしていないが、特に警戒をしている訳でもない。

出合いこそ敵対的だったものの、その後は曲がりなりにも共闘すらしている以上、仕方のない反

応かもしれないが、カイルにとつてはやはり不満だった。

「久しぶり、と言うほどでもないか。お前達とはよくよく縁があるな」

ユーリガは相変わらず^{れいり}伶俐な美貌に何の感情も表さないままで言う。

「……何故ここにいる？」

とりあえず斬りかかるという選択がなくなつて苦々しく問いかけるカイルに、ユーリガは直接は答えなかった。

「……不思議に思わなかったのか？ 我ら魔族が、人族領にて不自由なく活動できていた理由が」

そう言われれば、とカイルも思い当たる。

初めてユーリガに会つたのは、鉦山都市カラン。次に会つたのはエッルス国。共に人族領内部で、特にエッルス国は人族領のほぼ中心にある。魔族領から大きく離れているのに、そこまでの移動はいつたはどうしたのか。

魔族だからといって透明になれるはずもなく、外見の目立つ魔族が人の目に触れずに移動するには、当然それを手伝う者の存在が必要になる。

「人族に、魔族の協力者がいたということか……！」

カイルは、クラウスを睨み付ける。

「正確には魔族の協力者ではなく、お得意様が魔王だったということなのだがな」

「同じことだ」

微妙に訂正するクラウスに、カイルは吐き捨てるように言う。

カイルからしてみれば、魔族に力を貸すことなど、人族に対する重大な裏切りにほかならない。「ああ、言いたいことは解るが、とりあえず落ち着いて話を聞いてもらいたい。いや、どうやって会おうかと考えていたところへそちらから手紙が来たときは、マラナイ様のお導きと喜んだものだ」

商売の神マラナイの名を出し、機嫌よさそうに笑うクラウス。

「……魔族と繋がっている分際で神の名を語るな」

カイルの辛辣な嫌味も、クラウスは飄々^{ひょうひょう}と受け流す。

「うゝむ、そこら辺は見解の違いだな。儂は魔族全体ではなく、魔王個人を気に入っているだけだ。だから協力している」

「それが人族に対する裏切りだと解っているのか！」

カイルの怒りの声にも、クラウスは心外と言わんばかりだった。

「いや違う。むしろこれは人族のためという大義名分があるからこそ、儂は汚名を被つてでも協力している」

少々白々しくありつつも、クラウスは本気で言っていた。

「……どういう意味だ？」

「知っているのだろう？ 今の魔王が人族に友好的だと。そうすることが将来の人族のためになると確信しているから、協力している……まあその過程で色々役得ももらつてはいるがね」

上機嫌に笑うクラウス。

「いや、人族領では中々手に入らない物が、魔族領には豊富にあるからな。まさに独占貿易、実に儲けさせてもらっているよ」

「結局金のためじゃないか」

「そこは商人だからな、否定はせんよ……だがそれだけではないのも間違いない」

クラウスはあくまで真面目に言っているようだが、魔族に協力しているという一点だけで、カイルにとって彼は敵も同然だった。

「本題に入るぞ」

険悪になりかけた雰囲気きんぐうきを遮るように、ユーリガが割り込んでくる。

「魔王様がお前達に会いたいとのことだ。一緒に魔族領へ来てほしい」

「……は？ なんだって？」

一瞬何を言っているのか解らなかつたカイルが思わず聞き返す。

「言葉通りだ、魔王様がお前達に会いたがつておられるので、私と魔族領に来てほしい」

ユーリガは自分の感情は出さず、淡々と要件を伝える。

「何故だ？ 会って何をしたい？」

カイルは理由を問うが、ユーリガは首を横に振る。

「魔王様の御心は、私などには計り知れない。だが会いたいと仰られた以上、私は望まれる通りに動くだけだ」

「こつちには会う義務も義理もないぞ」

即座に断るカイルだが、これはユーリガも予想していたことだった。

「まあ当然の反応だな」

「当たり前だ。ついた途端に魔族に囲まれてそこで終わり、なんてことにはなりたくないからな」

「安全は保障するし、ただ来てくれと言うつもりはない。お前達の利になるようないくつかの条件を用意してある。まず、この間手に入れた『竜王』ドラゴンキングの皮だが、どうなった？」

「それは……」

ユーリガの問いに、カイルは言葉に詰まった。

ユーリガの言う皮とは、メーラ教徒に利用されたドラゴン、グルードを助けた報酬がわりに手に入れた『竜王』ゼウルスの脱皮した抜け殻のことだ。

素材としては伝説や神話に登場してもおかしくない逸品だったが、それ故に扱いに困った。

カイルは鎧に仕立てるべく色々と当たってみたのだが、現在の人族では加工すらできないことが解っただけで、宝の持ち腐れとなっていた。

カイルが返事できないのを見て、確信したようにユーリガが続ける。

「どうやら今の人族の手では加工もできなかったようだな……だが魔族には可能だ」

「ふむ、では魔族領に行けば加工してくれるという訳か？」

シルドニアが興味深げに聞く。
かつての魔法王国ザールレスでならば加工できたはずだが、その技術も今では失われている。それを魔族ならばどうするのかと気になるころなのだろう。